

エドワード ジョーンズ Ph.D.

麻生太郎氏が自由民主党総裁に選出されたことで、政治の中での宗教の役割が問題になるだろう。麻生は靖国神社の宗教法人からの分離を支持するカトリック教徒だ。彼は小泉首相の靖国への公的参拝を擁護したから、これが宗教についての論議を醸し出すのは間違いない。当時小泉は靖国で首相と記帳したにもかかわらず個人的参拝だとして正当化した。日本のカトリック司教はこれを批判し、カトリック信者に靖国へ行くのを控えるよう促した。

靖国神社を宗教法人から分離することでカトリック教会との問題からは逃れられるだろうが、靖国を公的な追悼記念施設とすることは戦犯と宣告された者を追悼することになるという問題を再燃させるのではないか。なぜなら分離がその政治的意図をいっそう明確にするからだ。これからも言えることは宗教、倫理、政治を混ぜることの難しさだ。

この問題はアメリカ人には非常に明瞭だ。特に現在の大統領選では明らかだ。アメリカの政治家が自らの宗教を公にすることが期待されていることは知られているが、アメリカでの宗教と政治の論争に日本人はほとんど気がついていない。その結果日本人には宗教の影響があることはわかっているにもかかわらず微妙なニュアンスはよく見えず、そのインパクトははっきりしない。

そこで、現在進行中の大統領選のキャンペーンで宗教について多数の主張がもつれていることに言及しよう。例えば、バラックオバマの信仰を取り巻く作為的論争がある。彼は自から公にしたようにキリスト教徒で規則正しく教会へ通っている。にもかかわらず彼の信仰について非常に多くの風評が飛び交っている。彼が通っていた教会の牧師の「アメリカ人らしからぬ」言葉を強調する者もいれば、オバマは密かにイスラム教徒だと言う者もいる。

こうした風評は「価値観選挙民」を左右することを目的に流されている。典型的価値観選挙民は、宗教を生涯の中で最重要と位置付ける福音キリスト教 (Evangelical Christianity) の特定の一派の支持者である。価値観選挙民は聖書の言葉を文字通りに解釈し、性的特質、生殖、墮胎といった「家族問題」に焦点をあてようとする傾向にある。多数の厳格なキリスト教原理主義者はアメリカ合衆国が疑うことなくイスラエルを支援しイスラエルの敵対者すべてに歯向かうことを聖書が命令していると信じているのだ。従ってイスラム教徒や自分達の信仰を受け入れない者と抗争するのは当然だと信じている。

このような状況は宗教的に寛容な日本人には理解しがたいものであろう。福音の預言という側面を考慮すると更にとまどうのではないか。神道や仏教に

は「終世」とか「審判の日」というものがないから、そのような概念が政治判断に影響を及ぼすことができるということ自体、ほとんどの日本人には現実離れしているように映るであろう。

いづれにせよこれは多数のアメリカ人にとって正真正銘の現実なのだ。その上、極端な信仰者は、今の経済混乱やグローバルな紛争は天国へ昇天する日が来るためには避けて通れない前兆だと見なしている。預言では昇天する直前に地球が破壊され信者のみが再び定住できるよう再建されるのだという。サラペリンが成人してから通っている教会はこの信仰を持つ一派だ。

彼女と信仰を同じくするアメリカ人は現在の状況を預言を基に解釈し胸を踊らせている。一方信者ではない多数のアメリカ人にとって大統領となる可能性のある人物が世界の終焉抗争の必然性を信奉しているということは大きな危惧材料だ。一般的に日本では宗教は政治からほぼ切り離されていると考えられている。政治家が靖国参拝を行い他国で批判が起こったときにのみ注目される程度だ。アメリカ大統領選での宗教のインパクトに日本人は気がついていないが、政治と宗教の密接な関係を認識するようになれば日本でも多数の人々がこの懸念を共有するようになるのではないだろうか。